

「学生」として大学で体験すべき「学び」と「創造」



工学部長

岩谷幸雄

学校教育法では、小学生は「児童」、中学生・高校生は「生徒」と呼ばれていますが、大学等の高等教育を受けるみなさんは「学生」と呼ばれ区別されます。では、高等教育機関としての大学とは、これまで過ごしてきた学校とはどう違うのでしょうか。

文部科学省の中央教育審議会の新時代における高等教育機関の在り方という文章には、「大学は、学術の中心として深く真理を探究し専門の学芸を教授研究することを本質とするもの（以下略）」とあります。もう少し理解しやすくするために、「教授研究」という言葉を「教授」と「研究」の2つに分けてみましょう。「教授」とは、学術を教え授けることです。この言葉の主語は、教員になってしまいますが、学生のみみなさんからみれば、人類が長い時間をかけて体系化してきた学問・知識を、講義や実習を通して身につけていく作業になります。この作業は、「生徒」として学んできた中学高校の営みとあまり変わらないかも知れません。では、もう一つの「研究」の位置づけとはなんでしょう。前述の文部科学省の文章には、「社会が発展していくためには、その基盤として、新しい知識を創造するとともに高度に活用する高い専門性を持った人材を育成することが不可欠である。人類の長い経験と叡智の中で、これを最も良く担う社会的な存在として確立されてきたものが大学にほかならない」という記述もあります。つまり、単にこれまでの知識体系を教授するに止まらず、新たな知識を積み重ねることが大学に課せられた社会的要請であり、その「創造」の営みが「研究」です。さらに、「研究」を体験し、新しい視野を兼ね備えた学生を人材供給して社会を発展させることが高等機関としての大学の存在意義ということになるのです。

このように見ていくと、「学生」として大学で体験しなくてはならないことは、これまでと同様な「学び」だけでなく「創造」が重要であることが理解できると思います。特に、工学部を卒業して技術者を目指すみなさんは、「技術の創造」によって直接的に社会を豊かにする喜びを味わうことができます。これは、比較的長い時間をかけて社会に定着することが多い文系の学問とは異なる特徴です。さらに、「知識の創造」は人類の未来への貢献にも繋がります。学生生活を過ごす中で「創造」の体験と喜び・興味を感じた人は、大学院への進学も真剣に考えてみてはいかがでしょうか。

ところで、「学び」の営みは、近年厳格化が進んでいます。「単位の実質化」のために学修時間の確保が必要とされており、具体的な事前・事後学修を「学び」の営みの一部としてシラバスに掲載して学生に課されています。また、単位あたりの学修時間を確保するために履修単位の上限制度も運用されています（1～3年生は年間44単位、4年生は年間48単位）。さらには、GPA（Grade Point Average）など、みなさんの「学び」を客観評価するための指標も導入・運用されています。GPAは、成績を総合的に評価するための指標であり、学修指導等に使われます。加えて、多くの講義では出席を求められます。みなさんには、単に出欠のための出席で貴重な時間を浪費するのではなく、一つでも二つでもなにか新しい知識をその時間内に獲得するような心構えを持って講義に臨むことを期待します。先生への質問も大いに結構です。少しの積み重ねが、大きな花を咲かせるでしょう。また学生だけでなく、教員側における教育プログラムや教育組織についても、「内部質保証」のための点検・評価や、環境建設工学科の環境土木コースにおけるJABEEプログラムなどを通して客観的視点から改善を続けています。学生と教員がインタラクションしながら、みなさんの「学び」の営みを進化させていくことが社会的にも望まれています。

東北学院大学工学部は、このように「学び」と「創造」の体験が可能な教育プログラムを用意しています。これらのプログラムは、工学部に掲げられた理念・目的、教育目標と、教学上の3つの方針（学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針、入学者受け入れの方針）を元に、各学科のカリキュラムとして具体化されていますので、一度それぞれの方針を読んでみて下さい。その上で、工学部の理念・目的に表されている「幅広い教養と正しい倫理観を持つ工学技術者」とはどんな人物像なのかを常に自身に問い続けながら学生生活を送って下さい。

「学び」と「創造」を通して「開拓精神」のあふれる技術者になることを期待しています。